

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

「党建協」の強化で社会党の再生を……………2
強力な社会主義政党的建設と指導が不可欠……………3

——一九八八年 われわれの進路(二)——

◇岩井章氏に聞く◇

「理論と実践の弁証法的統一」が課題……………11
成功をバネにいつそうの反撃体制を……………15

——一・二七兵庫県集会の報告——

逆流を本流の力に(鹿児島仲間から)……………19

青年は未来に責任を(佐賀の仲間から)……………20

投稿 左派の姿勢が問われる……………21

資料 党組織改革に関する緊急提言(党建協)……………22

一・三〇全国交流集会のご案内……………14

二・一〇「社会党ガンバレ集会」に参加しよう……………24

読者からのおたより……………18

編集部だより……………18

旬刊 社会通信

NO. 357

一九八八年一月二二日

一九八八年一月二二日発行

(毎月一日・二二日・三二日三回発行)

■巻頭言■

「党建協」の強化で社会党の再生を

昨年末、「北海道社会党建設研究会通信」第一号が、本紙編集部に届いた。立派な「通信」である。巻頭の辞を渋谷澄夫氏（党建協・北海道党建会代表委員）が書かれている。社会党大会が一ヶ月後にせまった現在、この巻頭の辞を紹介することによって、本紙の巻頭言とし、全国の仲間たちに「党建協」強化をよびかけたいと思う。

「自衛隊機が遂に、ソ連機に発砲した」との報道に、私の心臓は一瞬止まったかと思うほどのショックを受けました。たとえ、警告であるにせよである。文民統制はどうなっているのか、指示命令系統はどうなっているのか、隊員独自の判断で発砲が許されているのか。また、本道では国道を我が者顔に特車などが走り回り、アメリカ空軍機の低空飛行など、きわめて国民不在の行動が多発しています。

私なりに考えるならば、これはすべて山口見解が起因していると思うのです。反安保、反自衛隊、反原発を柱に据え、護憲の旗を高々と掲げてきたかつてきた日本社会党の書記長が、これらを否定するような見解、とくに専守防衛などという言葉を使うということは、まさに自民党の考えに同調することであって、いくら非武装中立、護憲の党と呼んでみても、空しく響くだけであります。

「政権党となるために、如何に現実を容認するのかとよく言われています。しかし、日本の現状は危険な軍事拡大と人心の荒廃により、政治は末期的な症状と言ってもよいでしょう。……本道の一次産業、とくに農業、林業、水産、石炭などを強引に潰し、労働者の働く場さえ奪いとる現行の政治を認めることが、現実的と言えるのでしょうか。政治の反動化は、当然、国民の立場に立つ野党が阻止すべきです。中でも日本社会党は権力に敢然と立ち向かい、果敢にたたかう政党であるべきです。」

「ソ連チェルノブイリ原発事故は史上最大のものであり、原発の危険を人類に知らしめたところですが、我が党の内部には、政府が推進する原発政策に追従する者さえ現われてきています。」

自民党の国民世論操作による、真実を知らせないやり方、真実でないものを真実と感ぜさせるやり方は、学界からジャーナリズム、労働界までもまさこむものです。

軍備撤廃の主張が、現実離れた理想論であるかのような風潮が広まりつつあるなかで、その風潮に妥協し社会党が、我々が及び腰になってしまったら、いったい誰が憲法擁護の論陣をはり、生命を賭して改憲勢力とたたかうのかと憂慮にたえないのです。」

「いま、社会党を支持し協力してくれている人々は、我が党の動向を注目しているはずです。国民のためにたたかう政党として再生するのか、あるいは国会内で自民党と表面では対決する姿勢を示しながらも、裏で取り引きする。なれ合いの『現実』政党と堕するのか。多大の関心をもっている。かつては有権者全体の二五%もの支持を集めた社会党が、半分になってしまったことのすべてを、時代おくれの革命路線のせいにするわけにはいきません。」

「革新とは何なのか、社会党の役割は？ その基本とすべきものを今どうするのか。私たちは将来の旗を守ることこそが、我が党を強め発展させることになることを信じ、このことを今、改めて総括すべきときであると考えているのです。」

全国の仲間たち、東北、九州の仲間たち、この北海道の仲間の問題提起を我が者とし、「党建協」の強化——これは憲法を守り、社会党の基本政策を守ることを意味する——に全力をあげようではないか。

強力な社会主義政党的建設と指導が不可欠

一九八八年 われわれの進路(二) 坂 牛 哲 郎

右翼再編成

破壊され、右翼幹部により握られた組合は、六二年、同盟会議に組織され、六四年、J Cが結成された。六七年、全通・宝樹による「全的統一」の提唱は、この分裂組織に総評を吸収合併させるといったものであった。

これに反対したのが岩井事務局長、それを支援したのが官公労、中小民間組合である。資本・権力は国労、全通、日教組等官公労に全面攻撃を加えた。官公労はよくこの攻撃に耐え、右翼再編成を粉碎し、総評、社会党は七〇年代前半、第三の高揚期をむかえている。八〇年代、敵は福祉国家から軍事国家に転換するため、総評・社会党解体、全民労連育成に全権力・資本あげて取りくんだ。国労解体は最終的に失敗し、いま四万三千人の国労は、多数の社会主義政党员、活動家を擁し、たたかっている。日教組は前記のとおり八八度大会、八九年五月大会を決戦に左派戦線の再構築にとりくんでいる。全港湾等、民間一五単産は反全民労連の旗をおろすことなく、激しい抵抗をつづけている。

職場反合闘争、競争原理排除のたたかい

前記のように、いま全民労連に反対したたたかっている組織は、「能力主義管理」に抗し、職場反合闘争を土台にし、組織闘争をたたかい抜いてきた組合である。このことは、日教組左派をみればはつきりする。七〇年代、左派は福岡、北海道、東京都高教等ごく少数であった。

これらの諸組織は、「能力主義管理」の日教組版である「人材確保法」「主任制」に反対し、激しい抵抗闘争をつづけてきた。とくに、七五年強行された「主任制」については、下級職制配置、分断、差別を排除するため、「主任廃止」「主任手当返上」の激しい職場、組織闘争を、現在にいたるまで継続発展させ、左派は拡大、発展してきた。

この職場闘争と、「教え子を再び戦場に送らない」反軍国主義の思想闘争が一体となって、左派の諸組織は反全民労連の旗を高くかかげているのである。

各組織、各職場により、たたかいかたは多様である。原則は職場反合理化闘争による「競争原理の排除」である。日常、職場闘争により労働者はきたえられる。そこで生まれる「労働者闘争の自然発生の昂まり」を重視すべきである。レーニンの「自然発生的要素とは、本質上意識性の萌芽の形態にはかならない」という、あの珠玉のようなことをわれわれは銘記しよう。

職場闘争でたたかっている労働者が、社会主義思想の学習にはげむとき、はじめて「目的意識性」をもった階級的労働者に成長する。競争原理に抵抗し、労働者の横の団結を追求する職場がつくり上げられてゆく。この闘争を各職場で、己の生きざまをかけて創意をこらしてすすめるようではないか。

たたかいの拠点に結集しよう

いま全民労連指導部は、活動家の背後から鉄砲をうつ。資本と一体となって、威嚇し統制処分を加えてくる。活動家は、個々バラバラではたたかえない。相互に連絡を取り合い、情報を的確につかみ、迅速に次の行動に移らねばならない。

たたかひのセンター、拠点是不可欠である。いま総評内全労連反対組合は、民間約一五単産五五万、官公労三単産(全林野、全水道、国公労連)二二万である。不明は七組合七〇万(うち日教組六〇万)、日教組が「反対」を明確にすれば、「反対」は約一三五万となる。この数は賛成二七〇万の二分の一にあたる。一九九〇年、総評は「解散」決定のため、代議員数の三分の二を確保しなければならない。今後二年間、たたかひかたよつては総評を解散させず、その「戦闘的、階級的伝統を継承、発展させる」ことは、不可能ではない。

そのため中央、地方、地区ごとに全労連反対の国労、日教組、全港湾、全国一般等を中心として、左派単産のブロックを形成する。このブロックを拠点にしてすでに全労連に加盟している単産の活動家、良心層は、さまざまな形で結集してゆこう。そして、いまますべきことは、前記競争原理排除の職場闘争を土台にして、全労連が投げすてた、具体的運動の推進である。

反軍拡、反行革、反首切り、反失業、反合理化、反核平和闘争の推進である。とくに、「国民春闘会議」が結成されず、連合が「春闘」を放棄しているいま、「春闘」の再構築は、急務である。すでに中央では、国労を中心に約一五単産が結集し、「八八春闘懇談会」が結成されている。たたかう意志のある単産、組織は、自主的に結集し、相互に連絡を取り合い、春闘の原点にかえて、たたかひを構築してゆこう。

新しいたたかひの主体、左派結集はこのような運動の強化のなかで、つくり上げられる。とくに、いま強調したいのは、県評、地区労の役割りである。総評の「たから」として、地域闘争の拠点としてたかかってきた県評、地区労はどのようなことがあっても「解体」してはならない。全労連の下部組織になつてはならない。前記、具体的運動を強化し、県評、地区労を守り抜いてゆこう。

このことが「総評解体を許さず、その戦闘的、階級的伝統を継承、発展させるたたかひ」である。「労研センター」は、このたたかひを強化するため、「核」となる活動家の結集体である。情報交換、研究センターである。いま、この組織はまじめな活動家の要望に答え、全国各地に拡大している。「労研センター」に結集し、その組織を地区段階にまで拡大し、前記闘争の「中核」となり、運動を発展させよう。

企業内組合の限界

私は今次「日教組闘争」で、「企業内労働組合」の限界を痛感した。国労にしても、日教組にしても、いま全労連に反対し、たたかっている諸組織は、七〇年代、反権力、反資本の凄じいたたかひをやり抜いてきた組織である。民間大企業労働組合の全面崩壊が行っているとき、職場反合闘争をたたかひ、職場破壊、能力主義管理導入を阻止し、たかかってきた組織である。とくに、日教組左派系諸組織では、前記のように、このことははっきりしている。しかし、このようにたたかってきた日教組左派も、各県別組合、企業内組織の弱点を克服できていなかった。

たしかに、競争原理に職場労働者をまきこませないたたかひこそ、職場労働者の団結をたしかなものにする。職場闘争、組織闘争こそ、反独占、反権力、反全労連とたたかう力の原動力である。しかし、日本の政、財、全労連指導部一体となって、凄じい攻撃を加えているとき、それだけでは、とうていふんばり切れるものではない。

私は、今次日教組闘争でこのことを痛感した。企業内組合の限界を乗り越え、階級的視野に立った社会主義者でなければ、とうてい、こんにち明確な、明日への展望と確信を持ち得るものではない。全労連の歴史的位置づけを明らかにし、分裂の威嚇、「協共連合」

等、なりふりかまわぬ右派の攻撃を粉碎し、確信をもって仲間をゆり動かしてゆくことはできない。いかに誠実に、職場闘争をたたかっても、「明日はどうなるかわからない」では、とうてい職場労働者の魂をつかむことはできない。日教組は国労に比べ、社会党左派系党員の比重は、圧倒的に少ない。今次、日教組闘争ではこの弱点が、はっきり露呈した。いま必要なのは、マルクス・レーニン主義の原則に立つ社会党員の拡大、企業内労働組合の限界を打ち破る階級的労働運動の建設である。

階級的労働運動とは

「階級的労働運動」とは、「自然発生性」と鋭く対立するものである。「労働者階級は、全く自分の力だけでは、組合主義的意識、すなわち組合に団結し、雇主と闘争し、政府から労働者に必要な法律の発布を勝ち取る必要がある」という確信しか、つくり上げ得ないことは、すべての国の歴史が立証するところである。労働運動を「自然発生性」に放置するならば、運動は、まさにブルジョア・イデオロギーに従属する「ものとり闘争」におち入ることは、避けられない。

「社会主義意識は、プロレタリアートの階級闘争のなかへ、外部からもちこまれたものであり、自然発生的に生れたものではない。」

ここに、社会主義者、社会主義政党の任務がある。社会主義政党は、労働者階級の歴史的任務の実現を使命としている。労働者階級が、自己を解放する歴史的な使命をなしとげるため、その意識を高め、組織化してゆくのが、社会主義政党の任務である。

しかも重要なことは、社会主義政党の指導とは、その手段、方法を頭の中からあみ出し、労働者におしつけることではない。

個々の社会主義政党員が労働者とともにたたかい、ともに学習し展望を明らかにし、その階級的自覚を拡大することである。「自然発生性は、目的意識性の萌芽である」という、レーニンがたたかいたのなかから見出した原則を基本とし、活動することである。

以上、レーニンの『何をなすべきか』を中心にその思想を記したが、「階級的労働運動」の核心は、これにつきるといってよい。いまわれわれに必要なことは、マルク・レーニン主義に立脚した社会党員の拡大と強力な社会主義政党の建設である。

全民労連がいま「政界再編成の起爆剤」として、社会党の変質、社・公・民・連合の統合を迫っているとき、そのことは、はたして可能なのか。歴史的経過の中から、社会党、総評衰退の原因、発展の道を社会党の側からさがし求めよう。

躍進する左派社会党、総評運動

総評は一九五〇年結成された。結成大会で「北鮮軍の侵略反対と国連支持」を決定し、朝鮮戦争拡大に賛成した。その総評が五一年大会で、平和四原則（全面講和、中立堅持、軍事基地反対、再軍備反対）を決定し、「にわとりからあひる」に変わったのは、分裂を経て指導権を獲得した社会党左派の強力な指導によるものであった。総評、青年労働者の入党はぞくぞくとしてつづいた。講和、安保条約をめぐる、五一年、左右社会党は分裂した。このとき、左派衆議員は十六名、右派は三十名であった。その後三回の選挙を経て、左派は八九名、右派は六七名に躍進した。めざましい左派の進出である。

その原因はどこにあったのか。当時、国労、日教組でたたかっていた人々は、口々に「われわれは反戦・平和・職場闘争の左派社会党方針にはげまされ、弾圧に抗して職場・地域でたたかってきた」と語っている。

たたかう労働者は左派社会党にぞくぞく入党し、その方針に激まされ職場でたたかい、

総評労働運動を強化するとともに、社会党の躍進をかちとってきたのである。この当時、総評は「三鉱連の英雄なき一一三日の闘争」をはじめ、日産自動車・王子製紙・尼鋼・日鋼室蘭のたたかい、炭労、電産闘争等、いずれも数ヶ月にわたる果敢なストライキ闘争を展開し、その力を強化してきた。

社会主義政党的指導による労働運動の強化は、形式的機関決定ではない。左派社会党員が、その方針にしたがって職場・地域でたたかうことにより、労働運動を強化し、左派社会党は拡大発展の道を辿った。そして五四年、社会主義革命、階級政党的立場を明確にした「左社綱領」の結実となった。

左右社会党の統一

この流れの方向を変えたのが、五五年、左右両派社会党の統一である。向坂逸郎、山川均の指導する社会主義協会は、この統一に強く反対した。統一が左社綱領の革命的な条項、精神を否定し、民社党化することを恐れたからである。

しかし、保守合同、日本独占の本格的攻撃を前にして、危機を感じていた太田薫等、総評大幹部の強力な圧力のもとに、統一はおこなわれた。したがって、つくられた綱領は左右の主張をつぎはぎし、矛盾に満ちたものである。この上からの統一に、左社下野党員は激しく反発した。社会党そのものに絶望した。

向坂、山川は、こうしたまじめな下野党員を激まし、たたかいの強化を訴えた。絶望をのりこえ彼らは立ち上がった。日教組勤務評定反対のたたかい、警職法粉碎闘争、三池闘争、安保闘争と労働運動を中軸にした国民運動は高揚した。追いつめられた西尾派等、右派の一部は五九年、社会党を脱党、民社党を結成した。社会党は党内を整理し、総評労働者とともにあの巨大な安保闘争をたたかいぬくことになる。

左右妥協の産物、矛盾に満ちた綱領をもちながら、左派下野党員は右派の妨害をはねのけ、三池・安保闘争をたたかってきた。その後、社会党内で生じた「構造改革論争」に結着をつけるためにも、「社会主義革命路線」を理論的にも政治的にもいっそう具体化し、明確にすることが迫られてきた。その結果が六六年決定された『日本における社会主義への道』である。党は綱領のあいまいさを克服し、「科学的社会主義の原則」に立脚した路線を決定した。六五年、「指令第四号」により「職場支部建設」を指令し、従来の「党員協議会」の欠陥を克服し、社会主義政党的指導性を明らかにすることを求めた。

指令第四号

この指令第四号に、社会党と労働組合の関係というよりは、社会党、総評ブロックの欠陥、そしてその克服の道が凝集しているといつてよい。

私は、本稿を記すにあたって、改めて指令第四号、「指導運営要綱」（六五年九月）を読みかえし、『日本における社会主義への道』作成当時の社会党指導部の気迫と、先見性に強くうたれた。党は六四年第二二回党大会で「組織問題検討委員会」を設け、第二四回党大会でこの委員会の報告をみとめ党規約の一部改正をし、「労働者党員の活動強化と、結集形態の整備」を決定した。この大会決定にもとづき、六五年二月「中央執行委員会指令第四号」―「職場の党活動をつよめ労働者党員組織を整備せよ」―が出されたのである。

その内容は、ずばりいうと「党員協議会」の誤まりを正すため、その改組をし、「職場支部を党活動基本組織とする」という内容である。その前文には、今日読んでも、目をみはるような指摘が記されている。

「企業主義、物とり主義、幹部負請主義等企業別労働組合の限界を乗りこえ、労働者一

一人の意識を發展させて、労働運動を階級闘争として發展させねばならない。」しかるに総評労働運動の現状は「支配階級がここ数年來の高度経済成長を通じて、体制をつよめ、合理化政策を全面的に展開しているのに対して、労働運動のがわは、極端な立ちおくれを示している。」このような現状は、「本質的には党の責任である。社会党が自己の指導性を運動のなかで確立していないことが、最大の問題である」と、問題点を明解にえぐり出している。

そして、「党員協議会」については、はたしてきた一定の役割を認めつつも、今や党、労働運動を混乱、衰退させる組織となってきたことを正しく指摘する。

①「党員協」活動は、職場党活動と機関的対策活動を混同してきた結果、労働者党員活動を組合活動に埋没させてきた。

②「党員協」と、党の基本組織との間には明確な指導―被指導関係がない。党から分離された産別党員協を実際に指導してきたのは、単産中央大幹部である。

③したがって、単産ごとに組織された「党員協」は、互いに独立した個別の指導体系をもち、労働者党員組織として交流と統一の条件が欠除していた。

このような実状は、「党員協」を党の「圧力団体」とし、党による階級的指導と対立する組織となることは明白である。ゆえに従来の党員協を改組し、労働者党員の基本組織は、「職場支部」とし、地域総支部に所属し、その指導をうける。

労働者党員は職場に支部を建設し党の方針にもとづき、反合理化、反核平和闘争等直接的党活動を展開する。組合としての諸闘争の展開にあたっては、企業をこえた産別統一闘争の階級的視点を明確にし、職場労働者大衆の階級的政治的自覚を高める。地域労働運動、住民運動を強化發展させる。

各級機関党員はグループを形成し、機関対策を行う。この活動は機関対策に限定し、基本本活動である「職場支部活動」とは、厳密に区別されねばならない。「党員協」は、従来とは質的に異なり、複数の「職場支部」の地域ごと、産別ごとの連絡交流の機能に限定する。その指導部は、機関党員でなく、職場党員とする。グループ、党員協指導部機関は、界層別に、中央本部、総支部とする。

以上、「指令第四号」をやや詳細に記したのは、現在の社会党を強化するためには、これ以外にはないと思うほど、適切な現状分析と、克服の方向が示されているからである。労資切り結ぶ、生産点の最前線に党の砦をきずくというこの指令は、その後どうなったのであろうか。

社会党、総評ブロックの実態

すでに述べたように、私が日教組、総評にいた六〇年代、社会党議員は単産政治局に從属していたのは、まぎれもない事実であった。左社時代、青年活動家として職場地域でたたかっていた左社党員は、単産、総評の幹部に成長してきた。組織にたいする影響力は拡大し、各単産で一括して「社会党支持」を決定し、選挙にあたっては、所属組合員の動員、財政援助を行ってきた。その具体的方針を決定するのが「党員（党友）協議会」である。「党員協」は単産ごと、全国、県、地域別につくられ、主として共産党に対決し、役員人事を掌握し、闘争路線を決定し、機関対策を行ってきた。「社会党支持」は、ほとんど「選挙闘争」に限定され、動員、財政支出を行なった。

これが、統一社会党成立後の「社会党、総評ブロック」の実態である。単産、総評は、選挙動員と選挙資金を圧力に、党を自らの意志に従わせる「圧力団体」に変化してきたのである。この方式は、五万党員の社会党に千数百万の集票を可能ならしめたかのように見

えたが、そのじつ、党組織を確実に腐食し、その指導性の喪失が、組合にはねかえり、総評の衰退をまねいてきたのである。衆議員数においても、五五年左右統一時の一五六名を上まわったのは、五八年一六六名だけであり、その後は衰退の一路を辿ってきたことは、その事実をはっきり証明している。

左社、総評ブロック時代は不十分ながら、レーニンの原則にしたがい、階級的労働運動を志向し、めざましい発展をとげてきた。それが統一社会党成立後、日ならずしてこの原則は放棄され、大衆団体たる労働組合が、社会主義政党をひきまわすという転倒した関係に変化した。

指令第四号の挫折

指令第四号は、この「危機」を適切につかみ、「社会党、総評ブロック」の再生を計ったものであった。前記のように六〇年代、独占資本は総評の方針転換に乗じ、凄じい合理化攻撃を職場に加えてきた。これに抗したたかう良心的活動家党员は、双手をあげて「指令第四号」を歓迎し、「職場支部建設」に取りくんだ。数年を経ずして、四百におよぶ「職場支部」はつくられ、党活動はすすんだ。しかし、職場党活動、職場闘争の進展は、機関運営と激突する。民同大幹部は、「党员協」の運営を改めることなく、ここを拠点にし機関運営を行ない、職場党员の真摯な活動を圧殺した。党中央の指導は、きわめて弱くこれを是正することができず、指令第四号の実現は、困難をきわめた。

機関決定による資金、動員力投入の安易なやりかたを変えることはできなかった。そのため前記のように、六〇年代民間企業労働組合の職場崩壊、右傾化にもなつて、社会党の衰退、右傾化が急速に進行してゆくことは当然であった。七八年、社会主義協会排除、八〇年社公民路線、八五年新宣言と、党、総評の変質は、総評、「横枝・富塚」執行部主導により進められてゆく。この延長線上に、全民労連結成、総評解体、社会党変質が、いまなしとげられようとしている。

「党员協」の反動性

以上、述べてきたように、「社会党、総評ブロック」は、統一社会党成立後、崩壊・衰退の要因を内包してきたことは明らかである。その決定的な組織が「社会党员協」であったことは、すでに六五年、指令第四号が正しく指摘したとおりである。

「党员協」は左派社会党時代、「労働者同志会」会員が左社に入社し、散在する総評青年党员が連絡、研究機関として、「党员協」をつくった頃は、たしかに大きな力を発揮した。労働者の自然発生性を無視した政治偏向や、労資癒着の支配する組合内で、階級的労働運動の正しい路線を確立するためのたか「党员協」は、少数派として同志的結合を深め、大きな役割りを果たしてきた。

機関決定による動員、資金投入も、それが、職場支部党员の吹き上がる活動、組合員大衆の社会党に対する信頼と期待という内実をともなっているときは、党、労働組合の前進、強化に大きな役割りを果たした。

しかし、「党员協」はある時点から、民同大幹部の組合支配の道具、党に対する「圧力団体」と変質してきたことは、指令第四号が正しく指摘するところである。とくに八〇年代、党、総評の変質衰退は、総評、「横枝・富塚」執行部主導ですすめられてきたことは、前述のとおりである。

いま全電通・山岸をはじめ、全民労連、各単産、党员協をみれば、その反動性は明白である。全民労連各幹部は、「党员協」により、組合を支配し、膨大な政治資金を運用し、

社会党の変質を迫っている。

日教組抗争において、このことは露骨であった。田中一郎は、「党員協」を日教組各級機関の上部におき、大会開催を拒否し、分裂をもって威嚇した。党員協による、組合民主主義の破壊である。しかも、右派系諸県の「党員協」には、本来の社会党員は、ほとんどいない。参院選比例代表区上位割りこみのため員数をそろえ一括党費を払った者がほとんどである。「党員協」の歴史的使命は終わり、今や党、労働組合破壊の元兇と化しつつある。指令第四号の趣旨に沿って、いまこそ「職場支部」を建設し、党、組合の強化を計るべきである。「党員協」は改組し、「職場支部」の連絡機関に止め、権限をもたせてはならない。

党の変質を許すな、党建協への結集を

迫りきたる大量首切り、軍国主義の攻撃に対し、党、労働組合が力をつくして立ち上がらなければならぬとき、党そのものが、破壊されようとしている。指令第四号が出されたときは、党が「党員協」の欠陥を指摘し、「職場支部」建設を指令した。これに、民同大幹部が抵抗した。いま党執行部は山岸等、全民労連大幹部の威嚇に屈し、党そのものを変質、解体しようとしている。

われわれは、まずこの「変質」「解体」とたたかわなければならぬ。内容の詳細については、すでに「通信」に数次にわたり報道されているので、重複を避けるが、執行部は下部党員の反撥を考慮し、二段方式で「変質」「解体」作業をすすめるようとしている。

すなわち、八八年二月大会で「組織改革」し、右派に便利な体制をつくり、次期大会で基本政策の転換を計ろうとするものである。その内容は、「民主集中制」の否定、「自立」参加、分権の市民原理」採用。「契約党員制」導入による二重党員制の採用である。

いま党に求められているのは、ひとつの組織体、集団としての行動である。その欠除のため、党が衰退しているとき、「民主集中制」を否定し、組織体の解体を計るとは、何たることか。

「契約党員制」はあまりにも反対が強いため、「協力党員制」にすりかえることも予想される。しかしこれとて、活動義務のない者を、年間六千円で入党させ、委員長選挙権をもたせるとは、その意図は明白である。「非武装中立」を守る土井たか子委員長を追い出し、基本路線を転換しようとする策謀は、許せるものではない。全電通山岸等、全民労連幹部が、ありあまる政治資金を投入し、大量の「契約党員」をつくり出し、党を意のままに支配しようとする策動は、粉碎しなければならない。

いま重要なことは、全党員、全党機関による徹底した大衆討議である。右派は大衆討議を恐れ、代議員工作により三分の二の確保を計っている。大衆討議により陰謀の本質を明らかにし、党を守り抜こう。党の変質を許さず、党を強化しゆくたたかいを、共にはげまし、大きな力にするため、「党建協」に加入し、その組織を全国津々浦々まで、拡大しよう。

このたたかいは、さし迫った攻撃に対する防衛のたたかひである。われわれはこの闘争を徹底してやり抜くまで、職場支部を建設、強化してゆこう。マルクス・レーニン主義の基本学習を強化し、社会主義政党としての、党強化の展望を切り開いてゆこう。

ハリコの虎に驚くな

「八八年われわれの進路」、その具体的内容を、はっきりさせるため、われわれは、総評、社会党の歴史的経過を分析した。衰退と発展の芽を追求した。

総評労働運動についていえば、すでに明白である。いま資本・権力に抗し、全民労連に

反対したたかっている組合は、「競争原理」が職場に入ること許さず、果敢に職場闘争、組織闘争を闘い抜いてきた諸組織である。

日常不断の「競争原理排除」のたたかいこそ、反合理化、反首切り、組織強化闘争の中心にすえなければならぬ。しかし、それだけでは不十分なことは、すでにのべたように、日教組闘争の経験からあまりにも明白である。

今後、予想される政、財、全労連指導部一体の攻撃に対しては、強力な社会主義政党の建設と指導は不可欠である。社会主義政党の正しい指導による「階級的労働運動」を強化することなくして、帝国主義ブルジョアと、その手先、全労連指導部を粉砕することはできない。日本社会党は、六五年「指令第四号」を出し、「正しい指導」の方向を明らかにしている。その実現を阻んだのが、現在の全労連指導部、その支配下におかれ、反動化した「社会党員協」である。われわれはこの歴史的事実をしっかりとつかみ、「職場支部」を建設し、マルクス・レーニン主義の学習を深め、職場労働者大衆の要求を結集し、党、労働運動の階級的強化に力をつくそうではないか。

敵は強大に見える。日和見主義者は、「バスに乗り遅れないため」浮き足だっている。己を正当化するため、愚にもつかない理屈をならべている。反動期は、いつでもこんなものだ。一九〇五―九年の反動期、レーニンを攻撃したものは、ツァー、メンシエヴィキだけではない。哲学的修正主義、最大の代表者、ア・ア・ボクダーノフは、著名なボルシェヴィキであった。

レーニンは、非合法プロレタリ、第二一号で「われわれが頑固派という綽名をつけられたのは、無理もない。しかしわれわれは最初の軍事的強襲の失敗にも、意気沮喪せず、度を失わず、冒険にうつつをぬかさようなこともないであろう。われわれは勝利にむかってすすんでいる」と、動揺と崩壊の最中、同志に訴えた。ただちに、「唯物論、経験批判論」を書き、ボクダーノフ等、修正主義を完膚なきまでに粉砕した。

敵は強大に見える。しかし、それは「ハリコノ虎」だ。帝国主義ブルジョアの手先、全労連幹部と、傘下労働者大衆との矛盾は目を追って拡大している。拠点産業は、ごくぞくと海外、東南アジア、アメリカ、ヨーロッパに移転している。七〇―八〇年代、世界の富を集めた鉄、自動車、電気が、大量首切りを発表している。全労連の中心組織労働者が、いま無慈悲にも大量に街頭に投げ出されようとしている。労働省は一九九五年、失業者は五百万をこすと公表している。実質一千万である。全労連は、企業が生きのびるため、産業移転賛成である。首切り反対闘争などたかうはずもない。食管会計廃止、農産物自由化は、日本農業を根底から破壊する。農民は生きてゆけない。全労連は、これにも賛成である。竹下は、大型間接税導入を明らかにしている。全労連は、この推進をきめている。資本、自民党の政策をとなら変わるところはない。

資本主義は、必ず己の「墓掘人」をつくる。資本と一体の全労連幹部と下部組合員大衆との矛盾は拡大する。しかし重ねていうが、これを組織化できるか否かは、われわれの力による。不屈の闘志をもち、生きざまをかけた正しいたたかいかただ。このことを肝に命じて、ともに奮闘しよう。

(終)

◇岩井 章氏に聞く◇

「理論と実践の弁証法的統一」が課題

日本の労働者運動は、昨年十一月、全民労連が発足したことによって、新たな段階に入った。全民労連の結成は資本の意図そのものであり、ねらいは二つある。一つは階級的労働運動の排除にもとづく日本労働運動の再編成、もう一つは労戦再編を「起爆剤」とする野党の再編だ。

八八年度の労働者運動は全民労連と八八春闘の動きを軸に(1)官公労「統一」、(2)地方の「統一」、(3)社会党の基本政策をふくむ「社会・民社の歴史的和解」の動向が焦点となろう。

総評指導部は昨年の大会決定「一九九〇年解散」実行のため、八八年は解散の「基盤づくりの年」、「一九八八年は官公労の時代」と強調し、「全統統一」という名の再編成の第二ラウンドをなりふりかまわずおし進めよう。

総評の解散は、「総評・社会党ブロック」の解体となり、社会党にたとえようもないインパクトを与える。こうして「総評・社会党ブロック」の解体は、日本の政治のゆくえとも関連する。政府自民党・財界の総意である「戦後政治の総決算」の土台づくりを終えたこと、憲法改悪への諸準備が完了したことを意味するからだ。

これはたんに「総評・社会党ブロック」の危機にとどまらず、日本の民主主義の危機だ。このようなとき、社会党左派の人びとの理論と実践が問われる。だれもがはじめて経験する「歴史的時代」であるだけに、よけいそうである。その先頭に立つ岩井章氏に、「いまわれわれは何をなすべきか」を問うた。

(編集部)

社会党と総評

問 私は最近、面白い勉強をさせてもらいました。岩井さんと荒堀さん(共産党が労働局長)が、『労働運動』(一九八七年十月号)で対談されていますね。一つはそのなかでの荒堀さんの発言です。

「なぜ、総評がそういう方向(解体・編集部)へいくかということは、やはり社会党の右転落と関係している。政治戦線の動向と労働組合の動向とはたいへん密接に関連がありますし、そういう意味では、社会党の右寄り路線というものが強く影響しているのではないか」

もう一つは、飛鳥田一雄氏(元社会党委員長)の『回想録―生々流転』(朝日新聞社刊)での発言です。飛鳥田さんは社公政権構想、馬場オロシ等を例にあげ、こう述べてます。

「労働組合が社会党の支持団体である以上、党に注文をつけるのは当然だよ。重要なのは、党がその要求を吟味して、独自に判断することなんだ。ボクの時代にも組合、とくに総評の口出しは多かった。党内にも総評の働きかけに呼応して党自体を変えていこうとする人が多くてね。そのせいで党がかなり変わっちゃたっていう印象があるんだ」

荒堀さんは総評を悪くしたのは社会党の右傾化といい、飛鳥田さんは党は総評に介入されたとおっしゃる。私なんかの見方も、飛鳥田さんに近いんですがね。

岩井 飛鳥田さんの本は面白い。飛鳥田さんの人柄がにじみでている。「通信」の読者に

すすめたい本だ。

問 私もこの本を読んで、飛鳥田さんの人柄にすっかりほれこんじゃった。飛鳥田さんへの印象も変わりました。

岩井 社会党の総評への指導性はもともと薄かったんだ。山川（均）さんや向坂（逸郎）先生のような強力な個性は別格としてね。総体としては総評のよくいわれた「左翼バネ」が、社会党の階級の良心を下支えする役割を果たしてきたんだな。

それが大きく変わってきたのが一九七〇年代後半だったといえる。飛鳥田さんが指摘するような事態が露骨になった。

必要なことわね、総評はなぜ解体に追い込まれたのかを率直に総括することだ。「左翼バネ」が「右翼バネ」になった背景をね。

問 これまで構造的に日本労働運動を代表してきた総評が、なぜ全民単連に主導権を譲りわたすにいたったのかということですね。

総評の戦闘性とその衰弱

岩井 そういうこと。四つの原因があると思う。第一になぜ総評の戦闘性が衰弱したかってことね。私が総評事務局長やってきたときだって、鉄鋼労連は絶えず「脱ける、脱ける」と脅してきた。「鉄」の意図は最初からわかっていた。しかし、事務局長として「どうぞご自由に、脱けていただいてもけっこうです」とはいえない。七〇年代、「鉄」に同調する組合がふえたわな。

問 たとえば全電通とか。そして、非主流だった「鉄」が八一年の総評大会では「半主流」になり、八三年の総評大会では「主流中の主流」にのし上がったかの観を呈した。全電通の社会党ジャック戦略があらわになったのもこの頃です。

思想的弱さ

岩井 第二に思想的弱さってことね。よく「労働組合で統一と団結を」って演説するね。問題はその中味だ。労働組合の存立基盤は、労働者仲間の競争をできるだけ排除することなんだよな。このことと思想性は一体なんだ。

しかし七〇年代、「ドル・ショック」「石油ショック」を背景に、能力主義管理が猛烈に強められ、労働者同士の競争が組織されたわな。そして、多くの民間大企業組合が資本の軍門に下った。このとき、反撃に立ち上がったのが国労の反マル生闘争だったんだが、このたかひの真の教訓も生かされずに終わった。一言でいえば、「自分を守るのは自分だけ」と考える労働者が増えることは、組合が衰弱していることの証拠なんだ。

問 先日、地方に行きました。そこで「横枝さんはなぜあんなに変わってしまったのしょうか」と質問がありました。

私、こう答えたんですけどね。先生はウソを教えちゃいかんのでしようが、横枝さんは「これまでウソを教えていたと自己批判しています」と。

日経連広報部から「私の労働運動史―労使後継者へのメッセージ」と題する本が、一八四年にできています。そこで横枝さんはこう書いています。

「労使といっても、一時代前とは様相をまったく異にしていること事実である。日本で資本家とは、独占資本とはいったいだれを指すのか、きわめて構造的になっていて、国家独占資本主義体制」とはいえても、具体的には資本家と労働者の区別があいまいになっている。これを近代的資本主義体制ともいうのだろうか。労働者も企業の株を所持して企業利益の拡大を願望しているし、大企業の社長・重役もサラリーマンで株主総会で

の追及におどおどしている。中小零細企業主には単純な資本家もいるようだが、それとて大企業の平社員（労働者）に仕事をもらうために平身低頭しなければならないというのが現実である。

こうみてくると、資本家というより経営者側に立つ人と労働者側とはどう対応すべきか、従来の古典的な労使関係とは一味違った対応が必要なのではないだろうか。先生つてのはもう少し勉強されているのかと思つていたのですが。日経連の一九七五年以降の『報告』が、横枝先生に「コペルニスキ的転換」の端初を与えたようではどうにもなりません。日経連の『報告』の中味は、ベルンシュタイン以来の主張の焼き直しにすぎないからです。これは労働組合の幹部諸氏がいかに思想的に弱いかを端的にしていると思います。

大組合主義が濶歩

岩井 第三に大組合主義が強まったことね。総評の「財産」とよくいわれるのだが、その財産の一つは中小、未組織労働者との連帯を重くみる考えだった。しかし、近年、それが弱くなつていったわな。そして、大単産の発言だけが重視される傾向が強くなった。**問** 「連合」は大企業組合の結集体ですからね。運動方針も「春闘」方針にもそれは明らかです。

岩井 経済構造の変化は正規雇用を減らし、不正規雇用の増大をもたらしているわな。女性労働者の比率が高まり、パート、派遣労働者の比重がふえている。このような状況の時、大企業労働者の利益だけを重視する労働運動では、とうてい多数派を形成することは不可だ。

全労連は五五〇万の労働者を組織したというね。たしかに数は大きい。しかし、日本の就業者数は約五八〇〇万人、労働者でさえ四三八〇万人いるんだ。これと比較すると五〇万はけつして大きくない。ここにわれわれの運動の方向があると思うよ。

問 そこで問われるのが地県評、地区労のたたかいです。もちろん、昨年二月一五日発足した「八八春闘懇」もその一環です。

日経連は「連合」が発足した日、会長名で談話を発表していますが、いま岩井さんがおつしやつた問題について—

「地方における労使の対話の促進が、従来にも増して重要性を帯びてくる。その面においても『連合』の指導性が発揮されるよう期待したい」と述べています。

岩井 政府・独占はいま勢いづいている。したがって、全局面をみる余裕があるということだろうな。

組合民主主義の弱さ

岩井 第四に指摘しなければならんのが、大衆路線・組合民主主義の弱さってことね。労働組合運営の原点は民主主義なんだ。われわれは社会主義政党と協力して、より深い民主主義社会を追求する以上、自らもより徹底した民主主義を作風としなければ、真の意味で組織強化が得られないことは、自明のことなんだ。

ところが、組合運営が形式的な民主主義に流れてしまった。これは、今後われわれが左派結集を考える場合、もっと重視しなければならぬことだ。

問 組合民主主義は「闘いとるもの」との意識が総じて弱くなった。私なども国鉄闘争ではじめて組合民主主義のなんたるかがわかった。さらに、労働者運動における「指導性」

「幹部論」についても考えさせられました。

古典を現代に生かす

問 岩井さんは『国際労働運動』十二月号（一九八七年）に「レーニンの論文から」との論稿をのせられていますね。従来の「視点」とはちょっと色彩が違うから驚いた読者もいたのではと思うのですが。

岩井 ちつともちがっちゃいない。ペレストロイカのモスクワを久しぶりに訪れたものだから、その機会にレーニンの論文を読み返してみたんだ。そして、レーニンの主張といまわれわれが直面している問題をちよつとばかり考えてみた。

今年はおつてなく全国を回ったんだ。そこで古典と現代についてさまざまに考えさせられたってわけだ。

問 たとえばどういうことですか。

岩井 あの小論にも書いたんだが、三つほどあるんだ。一つが、全民労連のなかで活動すべきか否かってことね。私が「受け皿」論を提唱したよ。それに、レーニンの『左翼小児病』の一節をとって、「どんな反動的な組合でもなかで活動することが原則だ」って主張が案外根深いんだよ。それへの私の考え方。

二つは政党と労働組合の関係について。これも「社会党・総評」ブロックの動行と深くかわる問題だ。

三つは経済闘争と政治闘争の問題ね。いまあなたが国鉄闘争で組合民主主義の本質、指導性、幹部論について勉強したといったが、それにかかわるわだ。一言でいえば政治指導と政治教育の問題だよ。それを改めて自分なりに勉強し、まとめてみたってわけだ。ぜひ読んで意見を聞かせてもらいたい。

問 「連合」の発足で労働者運動が新たな段階に入ったばかりでなく、日本をめぐる政治、経済、社会、思想状況もはじめて経験する時代に入っている。そこで、われわれも原則を学習しながら、同時に新たな状況に原則を適応しなければならぬ。まさに「理論と実践の弁証法」が問われる時代というわけですね。

岩井 そうだと思ふよ。

(つづく)

一・三〇〇全国交流集会のご案内

一月三〇日、国労委員長、都労連委員長、全港湾副委員長の三名のよびかけで、「総評運動の継承・発展をめざす全国交流集会」が、東京・日本青年館で開催される。

この集会は昨年の「七・六集会」を教訓に、「各地で開かれた『継承・発展』の集会、運動を教訓化」し、「各地の集会と運動の経験と成果を全国の仲間のものとして定着させる」ために開かれる。「八八春闘懇」を裏あるものとして発展させるためにも、「反全民労連」の集会を成功させた全国の仲間に、この集会への参加をよびかけた。くわしくは、本誌編集部にお問い合わせください。

◇一一・二七兵庫県集会の報告◇ 成功をバネにいつその反撃体制を

悪天候について四八三〇名を結集

兵庫の仲間たちを、「一一・二七兵庫県集会」が大成功裡に終了したことはくり返し述べた。ここでは「兵庫通信」第七号（一九八七年二月）より、この集会の成功の秘密がどこにあったのか、そして今後の課題を紹介する。

（編集部）

たたかう総評運動の継承・発展をめざす一一・二七兵庫県集会（以下、一一・二七集会と略）は、県下各地から四八三〇名の仲間が結集し、大きな盛り上りを作り出すことに成功した。

集會主役は結集する労働者

一月二七日当日は、昼から雨になり、受け付け開始時は本降りという悪天候であった。主催者側は参加者の出足が鈍りはしないかと心配した。しかし、雨について仲間は集まった。

最寄りの駅から会場の体育館まで長蛇の列ができた。高砂から電車でかけつけてきた女性参加者は、「駅から会場までの道順を知らず困っていたが、電車から降りる人全員が参加者風で、駅から体育館まで行列が続いていた」と驚嘆の声をあげていた。雨で道路が渋滞し、遠方からの貸切りバス参加者は集会半ばに到着する状況であった。職場の仲間と一緒にマイカー参加者も大変な数である。広い駐車場はあふれ、会場から四キロ近く車が並んだ。会場に入らず、結局参加できずに引き返す仲間も続出した。文字どおり受付は盛況というよりも、大混雑に近い。これが当日の会場、受付周辺の状況である。

何がいいたいのか。「集会の中味は、盛り上げるためにどうするか」など実行委員会は苦勞してきたが、素人の企画、一時間の講演、三〇分の闘争報告等約二時間の集会である。ある労組幹部が「こんな集会になぜこれだけ人が集まってくるのだろう」と首をかしげた。県下各地から、老若男女を問わず、一日の仕事で疲れた身体を励ましながらの参加である。その姿勢というか、労働者魂に心より敬服する。「下部は健全なり」というが、冬の夜、それもどしゃぶりの雨の中で、労働者の姿は迫力がある。この労働者の続々と結集してくる姿こそ、集会の主役であるし、この「数」こそが企画、ドラマである。様々な思いをこめての参加に違いない。要はこの仲間の気持ちと地域、組織でつかみ、どう具体化するかということであり、それが総括であり、方針である。

さらに、会場設営のため三時間も早く集合し、黙々と準備をする実行委員、その仕事は受付から集会後の後かたづけ、掃除まで続く。駐車場係や会場周辺の案内係は、雨の中、ずぶぬれである。金港湾・国労の組合機関的とりくみ、自治労等の仲間の応援はあったが、

文字どおり、呼びかけ、オルグ、ピラ作成、各地区集会など、下からの、金も組織もない手作りの運動である。実行委員の熱意は当り前だが大変なものである。

集会の成功は、何よりも、強まる首切り、権利破壊等の攻撃の中で、本当に自分たちの生活と権利を守るたたかいを求める仲間と労働運動の現状に不安を抱く実行委員の熱意（自己犠牲）によって生み出されたものである。この当然のことをお互いに確認する必要がある。

「県評解体」——危機意識の急速な拡大

一一・二七集会は、当初全民労連が発足する一月二〇日に予定されたが、会場の関係で変更されたものである。この集会開催での経過には、いくつか曲折がある。問題は労戦問題をどう大衆化するかということである。

兵庫では、労戦問題は兵庫労研センターを中心に、細々と進められてきた。多くの幹部、活動家が労戦の動向に不安や危惧を抱きながらも、基本的には産別内の動きに一喜一憂する段階で、積極的に批判の声を上げるところまではいっていないかった。だから兵庫労研センターは、国労、全港湾、自治労内の活動家を中心に、節々に「動員」による学習交流会を続けてきたのが実態である。いわゆる「左派結集」については、幹部活動家とりわけ労組機関役員に「異見」が強かった。兵庫労研センターも「左派結集」（理論）にこだわりすぎたという嫌いもあった。

一つの脱皮となったのは、昨年（八六年）から今年（八七年）にかけて闘われた国鉄闘争である。課題別ではあるが行革攻撃の天王山である国労攻撃に対し、県総評のサポータージュもあって、下から賛同人を募り、広く組合、個人に呼びかけ、県民会議を発足させ、九・一一国労支援集会（五三〇〇名）をはじめ、大きな流れを作り出すことに成功した。この経験をもとに、労戦問題を下からの大衆闘争と結合しようということになったのである。

第二は客観的情勢である。とりわけ、全民労連発足前に総評が一九九〇年解体を決めたことである。この決定は、組合役員を含め多くの幹部活動家に労戦問題に対する危機意識を募らせた。とりわけ官公労組も具体的な対応が迫られ、活動家も自らの態度を鮮明にせざるを得ない状況を生み出したのである。たとえば自治労の仲間は、自治労大会に向け機関的な押し上げを強め、一方では岩井章氏を呼んで労戦批判を公然化させてきた。

第三は、兵庫県総評大会（九月一七・一八日）での労戦問題をめぐる攻防である。県評大会を目前にして、共闘組織の縮小解体、オルグ・書記の首切り、即ち「県評解体」が浮上したのである。ここで労戦問題が現実化した。危機意識は急速に広まり、労戦問題の大衆化が始まった。（県評大会では七単産・単組の修正案として結実した）

兵庫労研センターは、自らの名前を出すのではなく、左派結集というよりもたたかう総評運動を守るというただ一点をスローガンにして「県総評の明日を考える会」ということで、広く活動家に呼びかけ、県評大会前日に、交流・決起集会を開いた。首切りに抗してたたかう仲間、国労の仲間のたたかいの報告を聞いて、このたたかいをつぶすのが総評、県総評解体だと確認し合った。これらの主な経過を経て、一一・二七集会のとりくみが始まったのである。

自らの態度が問われる労戦問題

第一回呼びかけ人会議は、九月二五日開催された。そこで確認は、五百名の賛同人を募り実行委員会を形成する。財政は賛同人の千円カンパと集会参加費でまかなう。たまたか総評運動の継承・発展をめざす」ということで広く呼びかける。一一・二七集会をとりくむ中で、労戦問題を大衆化する。あらゆるたたかい、たたかう決意の総結集の場とする。地区でのとりくみを強化する(学習会、集会、労組オルグ、共同行動)、国労闘争との連帯・支援を強める、等々である。

しかし、順調に進んだわけではない。労戦問題は昨年の国鉄闘争よりも「重い」という議論が起った。どうやって仲間に訴えるのか。積極推進の単産・単組内でどう呼びかけるのか。社会党総支部としてどう意志統一したらよいか。国鉄闘争を契機として地区で作られた「反行革の会」に労戦問題はなじまない、等々である。

即ち、たたかいと労戦問題をどう結びつけるかであるし、国労闘争をどう総括するかということである。具体的にとりくむ段階で初めて、地区の主體的な動きが問われることになったのである。私は一一・二七集会は労戦問題であって労戦問題ではないと考えている。労戦問題はまさしく職場の問題であり生活の問題であると思う。さまざまな反撃を、さまざまな反撃の決意を横につなぎ、具体的にたたかきを通して、今こそたたかう総評が求められていることを明らかにすることが私たちの任務ではないだろうか。また労働組合の中で流れに棹さす、労戦問題に自らの態度を明らかにすることは勇気がいることもある。

私たちはこのような議論をやりながらとりくみを進めた。賛同人集会は一月二〇日に実施されたが賛同人の獲得状況が悪く、この日が出発点だといっても過言ではあるまい。三五〇名の結集であった。この集いを契機によく本格化した。

各地区で賛同人集會、労組オルグ等が始まった。点検体制も強まった。第三回呼びかけ人会議(十一月九日)時点で五〇一名の賛同人を確保した。この呼びかけ人会議では中間点検の上になつて、いくつかの地区では「実行委」「反行革の会」そして地区労・評の動きが活発化しているが「流れ、動きを作り出せていない」とし、さらに地域集会、労組オルグを強める。国労支援闘争と連動する、機関のとりくみとして押し上げると確認し、賛同人の目標を千名にあげ、地区毎の集會参加者の獲得目標をたて、全地区のとりくみの活性化をうながした。しかし、活動家の配置状況、意志統一の段階等アンバランスは最後まで克服できなかった。

総括を徹底し、次のたたかいへ

集會は、約六〇団体四八三〇名の仲間が結集した。先述したように雨天のため受付や駐車場が混雑し帰宅したり、チケット回収が不十分だったりで確とした参加人員はつかめていない。集會時点での賛同人の確保状況は五〇団体(労組は産別数で三五団体)一一三七名である。賛同人については、国鉄闘争を上回り、参加者数では六〇〇名前後の減となった。本格的な総括は今からであるが、国鉄集會と比した特徴点について以下書いてみる。

①参加が減った産別は、全民労連推進派の組合で、上から参加不可の指示をおろした組合もあった。国労が約半数減となったが、これは組織減と家族会参加減である。また、いろんな配慮で動員を減らした組合もあった。一方、参加者がふえた組合は、自治労、全港湾、

そして県評大会に修正案を出した七単産を中心とした労組である。

②地区的にみれば、地区労・評の機関への押し上げた地区、反行革の会、党での議論が徹底したところは当然の如くふえたが、それはごく一部であった。とりわけ神戸市内では、いくつかの区を除き、地区でのとりくみが低調であった。地区集会等の開催状況は、極端に減っている。党を中心としたとりくみ、党と労働運動（大衆闘争）との関係がまだ十分であるということである。

③総じていえることは、一定幹部が腹構えを作り呼びかければ仲間には応えてくれるということだが、まだ企業内労組の域を出てないということである。賛同人の産別・企業をこえた集まりであるが、まだその意志統一が不十分であるし、地区毎の共同行動が弱いといえる。逆にいえば、そこが整理され具体化されれば、もっと広がりをもち得るし、深まりもでてくるということである。

また、大衆闘争といいながら、本当にたたかいが少ない。自らがたたかいを組織するという姿勢がまだ弱いということである。下からのとりくみといいながら、まだ指令・指示まちであり、一一・二七集会の呼びかけという一本の赤い旗の下に集まったということであろう。しかし、いよいよ独占の攻撃が本格化する。当然矛盾は激化する。その意味では私たちのとりくみと労働者大衆の不安、不満が結びつけば反撃もできるということである。

最後に今後であるが――

①当面する八八春闘をどう準備するか、国労のたたかいとどう連帯するのかははじめ、集会アピールにある九つの提起をどう具体化するかである。

②兵庫では、多くのたたかいかいの中で、たたかう組織がいくつかできてきた。それぞれ性格も違うし、そこに集まっている仲間も少しずつ違う。それを大切にし、この集会成功を機にどう活性化させていくかである。順を別にすれば、国鉄県民会議（地区会議）、反行革県連絡会（地区反行革の会）、総評運動を考える会、一一・二七集会実行委員会（地区実行委員会）、兵庫労研センター等々である。これに地区労・評、地区会議がある。全てがたたかう総評運動の継承・発展をめざす組織である。

③「兵庫通信」の読者にいえることは、社会党の民社党化阻止とこれらとのとりくみをどう結合させるかという重要な問題もある。何はともあれ、攻撃はますます激化するであろうし、この一一・二七集会の成功をバネにいっそう反撃の態勢づくりを強化することである。是非この集会にとりくんだ組織、団体、そして個人で総括を徹底し、次のたたかいへと結びつけて欲しい。

(MT)

◆編集部だより◆

▽読者からたたくさんの賀状をいただきました。誌面を借りてお礼申し上げます。

▽どの賀状も、「厳しさに負けないで頑張る」と、編集子を励ましてくださるものばかりです。編集子も全力をつくします。

▽「一九八八年、われわれの進路」に明らかかなように、一九八八年はわれわれにとって、新たな出発の年です。日本労働者運動をわれわれの手で作ります。この大きな楽しみにむかって邁進しようではありませんか。

逆流を本流の力に

——二つの大会から考える——

労働組合の各級大会がほぼ終わりました。党では、「組織・機構改革方針」の下部討論が始まりました。その中で討論の特徴は「右傾化」の大きな流れに対する良心的な、役員・党員からの率直な「危惧」でした。そこで、二つの大会討論会の報告をしたいと思います。

「笑い」巻きおこした全電通

八七年一〇月二四日、日置地区労（組合員約二千名）大会は、議長（鹿教組）の「中曾根の戦後政治の総決算路線は、結果として保革仲良くを目指し、全労連は労使仲良くの方針である。それは職場で抵抗したたかうものを排除する方向になりかねない。だからこそ地区労働の発展強化を」とのあいさつで始まりました。

討論は、「地区労働の発展強化」について集中しました。

（鹿教組）

「総括が選挙中心になっている。その総括も不十分だ。日常の共闘関係がうすらいできているからこそ、組織選挙が弱くなってきたことが明らかにされていない。昨年、四町職に自治労結成、地区労加盟の成果があったが、なぜ結成されたか学ぶべきである。おかしな方向（全労連）に行かないためにも市町労評の強化、共闘が急務である」

（全通）

「全労連は水と油だ。振ったときだけいっしょになるドレッシングと同じだ。職場の全郵政は組合員の利益を守るより当局の利益を守るのに必死だ。職場の現状（美態）を交流すれば、全労連へとはならない。その役割が地区労にあるのではないか」

（自治労）

「昨年四つの単組が自治労に加盟したが、きっかけは労働条件に対する不満から。加盟と同時にさまざまな闘いを組み賃金・労働条件改善で大きな成果を勝ちとった。職場組合員は『自治労に加盟してよかった』と率直に言っている」

（民間）

「四町職の加盟は、職場に不満がうっ積していたことと、串木野市職を中心に既存の単組がストライキをはじめとした闘いで大きな前進をしているからではないか。私たちの職場で言えば、郵政と同じで、配転、出向で相談に行っても組合役員から説得されるので、第二組合員の多くは「こんな組合なら、ない方がまだましだ」と言っている。全労連は、総評とか、同盟とかでなく労働組合そのものをなくしてしまうことではないか」

こうした、全労連に対する「危惧」「反対」意見が続き（延べ七〇八名）に出されました。全電通から反論の形で発言がありましたが、「大きくなることだからいいのではないか。それが今の流れだ。全電通は総評を切りくずしてでもとの方針を掲げている」と本音とも言える内容になり、会場に「笑い」を巻き起こしました。もちろん、大会集約は「地域労働運動の再強化のために具体的な運動を起こす」ことになり、ちかく、休眠状態であった三者共闘（自治労、鹿教組、全通）の初会合ももたれることになりました。

社会党の現状に危機感

もう一つは、一月四日に開かれた社会党総支部の討論会です。県本部から、「九プロ討論会で中央本部から提起されたことを私見を交えずに報告する」ということで組織・機構改革方針の説明があり、討論に移りましたが、年配から青年まですべての発言（発言延九名）が、「社会党はどこへ行くのか」との不安と契約党員制度に対する反対意見でした。「いろんな考え方の人が入党すると、かえって混乱する。」現状でも集まるのは三分の一、党員が増えても運動しない人（契約党員）が総括、方針を決めることになる。たいへ

ん危険だ。「今までの党と違った方向に行くのではないか。大企業労組の意向で動かされる党になってしまふ」等々でした。

また青年党員からは「国労の首切り（レッドバード）にはおっかむりしてきた。新宣言からだ。だからこそ青年労働者の社会党離れ現象になっている。労働者の不平不満を組織し職場で奮起するなら社会党支持は増える。契約党員制度は、献身的な党員に水をさす結果になる」と反合理化闘争の総括を踏まえての発言。「契約党員制度も党勢力拡大につながる気もする。しかし、権利が基本党員と同じでは問題だ。党友組織の拡大の意味を超えるべきでない」と、百歩譲っても「カンパ党員の域を超えるな」という、中央本部の「あせり」を理解しようとする良心的意見もありました。

集約は、「総支部の意志として県本部委員会に反映する」ことになりました。帰りの車中、討論会では発言されなかった先輩党員も議員も「これでは社会党がダメになる」と討論会の「流れ」（発言）に賛同の感想でした。

以上二つの報告をしました。下部の方では、はつきりした逆流が始まっています。この逆流を本流にしていくために、もてる力で運動にかかわっていく決意をこめて報告を終わります。

青年は未来に責任を

——佐賀で労戦を考える青年シンポジウム——

全民労連が発足した一月二〇日、佐賀市教育会館で「一・二〇『労戦』問題を考える青年シンポジウム」が開催され、会場は予定を上回る一三〇名が結集した。

このシンポジウムは、国労、佐賀教組青年部が呼びかけ人となり、県内の青年活動家、七単産、二団体、一三〇名が参加し、総評労働運動の継承・発展を誓い合った。

まず、佐賀教組松本陽一青年部長が力強く主権あいさつをし、国労佐賀県支部猪股青年部長の国労・教組からのアピール、「青年は未来に対し責任を負わなければならない。一九九〇年までの間に各単産、地区労、県評、共闘運動をつくりあげていく」を確認。会場にかけつけた橋口佐賀県評議長は、「すべての労働者が結集すること、闘う労働者階級の統一ならいいが、連合の『基本構想』、『進路と役割』はたいへん問題をもっている。総評が運動の体制をきちっともつことが大切。地区労、県評の組織強化を」と訴えた。

全体討論では、「今の職場の中に階級的労働運動をねざすことが必要。人間らしく働き続ける条件が奪われているなか、絶対的に仕事量が多いと当局にぶつけていこうと全員で確認した。自分たちの言うことだけを聞くものをこの指止まれの全民労連に反対」（自治労・M）、「仕事に追い回され、年休も仕事に合わせる。産業祭にテレホンカードを売ってこい。勤務すぎてもサービス超勤。係長同士のいがみ合いも多くなっている。また、公社時に考えられなかった解雇、停職処分が三人も出ている」（NTT・B）「ストなし春闘のなか、自分の組合で、会社のゼロ回答にストライキで闘ってきた。総評路線とは、ゆずれない要求のためにはストライキで闘うことだ。全統一といいたが、全国一般では、二〇日の全民労連結成に加盟しろと、組合費納入を凍結している地本もある。何のための全統一か。分裂がもちこまれていく」（全国一般・C）「分割・民営化は、合理化、人減らしに反対する思想を許さない攻撃。一つ一つの権利、国労バッヂをはずせ。立席呼名に従えと言ってくる。国労の反合、反失業の思想の排除がねらいだ。自分はただ定年まで働き続けたいと、当局にきちんと追及してきただけに清算事業団に送られた」（国労・D）「もっと人間らしく生きたい。健康で働き続けたいという気持ちは、連合に入っている人も、入っていない人も一緒と思う。そこから闘いの出発にしなければならない。毎日、九

時、一〇時まで働かされている中、月一回は五時に帰ろうとみんな実践している分會もある。第二組合の多いここでは、教組に入ることが闘い。自分にできること、となりにすわっている仲間とできることから一つ一つやっていこう。そこが生命と権利を守る第一歩だ」(佐教組・E)などの意見。

猪股国労青年部長が、「定年まで働き続け、生き続けるため、となりの仲間とできることを討論し、一九九〇年までの二年半に、自分たちの県評、地区労を自分たちのものとして作り上げていこう」と集約し、佐教組松本青年部長の力強い団結ガンバローで閉会した。

(佐賀・I)

◇投稿◇

左派の姿勢が問われる

一月二〇日、いよいよ全労連が発足した。このことはすでに予定されていたことであり、別に驚くに当たらない。いよいよ私たちは今後、具体的に何を実践していくのか、問われて来ると思う。ところが、左派と言われている人の中に、この右傾化の事実を目をつぶり、資本家の手先と迎合しようとする改良主義が蔓延しているように思われる。

最近の情勢をみたとき、臨調行革路線にみられるように軍国主義化、帝国主義の性格がますます露わになっている。この動きは、資本主義の性格・本質から当然の流れだと思ふ。その反動化のもと、それに耐えられない、ガマン強さのない部分が転向していくことも歴史上からも、思想性からも証明されていることである。

しかし、職場末端の労働者の状態、資本に首をきられた労働者、そして生活にあえぐ労働大衆の苦しみを直視しないことには呆れ果てる。この状態を直視することが真の労働者運動の姿であると思う。このように、全国いたるところに反撃に立ち上る客観的条件が十分にそなわっているのに、主体となる側に動揺がある。それを放置して置くことは再びファシズムへの道を許すことになると思うことは、科学的にも歴史的にも証明されていると思う。反合理化闘争、春闘、反首切りの闘い、反戦、平和の闘い、政治反動阻止の闘い等々の闘いが形骸化されていることに原因があるようだ。

最近、当地においても、自衛隊の洗車(自走砲)が堂々と国道を走行し、勤労大衆の抗議行動を弾圧しておきながら、自衛隊幹部は「住民からの苦情は一件もなかったので、住民に十分理解されている」と暴言を吐いている。この主因は、社会主義政党、労働組合がなめられている証拠であり、路線転換をはかりつつある、彼らの責任大であると思う。さらに、農業政策等々、ほとんどの政策を独占資本に奉仕する転換をはかろうとしていることは許しがたい行為である。

今こそ、形骸化されている基本的な闘いをしっかりとみつめ、弱さはどこにあるのか、どうすれば克服されるのか、明らかにし、社会党、総評の解体を阻止し、階級的強化をはかるために、具体的に実践することを全国の同志に強く訴えたい。方法論はいろいろあると思うが、最低、決意を一致させることが必要であると思う。この「対抗軸」が反動勢力に對抗し、ファシズムを阻止する唯一のカギである。全国の同志のご批判を仰ぎたい。

全労連路線粉砕、自社公民路線粉砕、「道」・総評路線を守り、ファシズムを許すな!

(北海道・A)

資料1 党建協(一九八七・二・三)

党組織改革等に関する緊急提言

現在下部討議に付されている党組織改革案については、圧倒的多数の党員が危惧の念をもち、このままでは廃案にするほかはないものであることが、明らかになっている。社会党を守り強化するためには、直面している組織改革にとつて少なくとも次のようなことが必要不可欠であると考へ、ここに提案するものである。

- 1、民主集中制の組織原則は、いかなる組織であれ、統一された活動力を生むための不可欠な要件であつて下部意見の重視など党内民主主義の確立によつて、内容を充実することこそが必要であり、廃棄・変更すべきではない。
- 2、現行規約が定めているように、党員はすべて平等な権利と義務を有するものでなければならぬ。したがつて、これを否定する二つの党員制度は、断じてとるべきではない。党友には諸会議に参加して意見を述べる権利を保障することなどによつて、党友の拡大にとつとめるべきである。
- 3、広域総支部、直轄支部は廃止して、すべての党員は支部(地域・職場)・総支部に所属するものとする。
- 4、党と支持・協力関係にある日本婦人会議を育成・強化するとともに、広く党友組織として「仲間の会」をつくり、女性市民との交流・連帯の場として発展させるものとする。
- 5、「支持団体」と「社会党を支持し強める会」は、社会党の候補者が立つ選挙区においては、その候補者を支持しなくてはならないものとする。「社会党を支持し強める会」は、党友組織として位置づける。
- 6、党費については、収入の1%を基準として総支部が決定し、運営に弾力性をもたせるものとする。県本部および中央本部への納入は、年齢別など一律にするものとする。ただし、各級議員などの党費は、現状どおりとする。
- 7、全国大会については、代議員に選ばれなかつた国会議員は特別代議員になるという従前の方式に戻すべきであるが、当面は三分の一の国会議員数の三倍を全代議員数とする)を撤廃し、都道府県からの代議員は国会議員の増減に関係なく、党員100人につき一人の定数とする。全国会議員および各県一人の女性に与えられる代議員権は、それとは別枠で確保されるものとする。
- 8、各部門別だけでなく、下部党員活動家の交流を深め、全国的に活性化するため、全国活動家交流集会、ブロック交流集会を時々開催し、中央はそこで出される意見を尊重して、各分野の立案、執行および指導に活かすものとする。
- 9、規約改正が行なわれるまでは、党の運営はすべて現行規約によるものとする。

社会通信号外

好評発売中!

労戦問題 ナショナルセンターと全国地県評方針

定価は五百円(郵送費含)、お申し込みは社会通信社へ

◆ 読者からのおたより ◆

私も「失業」という試練の中、「白髪がふえたね」といわれながら、仲間とともに頂上を見定めてふみしめています。

昨年の九月には、思ってもいかなかった諸先輩の方々が「社会党を守ろう」とよびかけられました。娘も何を思ったか、「お父さん一緒に食べよう」と毎朝おこしてくれました。

自分も負けてたまるかと、年末から自動車学校に通っています。車はどんな急なカーブにさしかかっても、つねに真すぐに走るための復原力をもっていることを知りました。労働者の歩く道はかがかしい頂上につながり、つねに人生の花がさく。今年もともに学び、ともに闘うことをおちかいたします。(松山・N)

教育をとりまく状況がますます厳しいなか、日教組がまだ昨年の今頃と同じ状況に置かれていること、残念です。「歴史の逆転」を狙うものを正しく見すえ、閉塞状況の打開に微力ながらがんばっていきたいと思います。(東京・N)

この一年は「大当り」の年でした。(1)分割・民営化による配属に「あたり」、本務をハズされ、(2)「オツカナイ顔している」と、駅の助役の暴言「あたり」、(3)人間らしく扱え！と、暴言に抗議して「出停」十日間の処分「あたり」、(4)虫歯に「あたって」医者通い、(5)年の瀬にカゼに「あたって」ノックアウト、(6)いつもこの時季になるとカゼをひくと妻のごとに「あたる」という始末。

しかし、悪いことばかりではありません。(7)九月十日に次女が誕生、命名に「あたり」考えたあげく「あさひ」と名付ける、(8)岩手の観光展でクジを引くと、スキーリフト券に「当り」、(9)息ぬぎにパチンコやれば六連勝で「大当り」。

三一日から長女(三歳)と雪国へ、何に「あたる」か楽しみです。(東京・C)

今年も「人間らしく働き続ける」職場づくりのために、頑張ります。(東京・E)

元旦恒例の「共産党宣言」学習会(第九年目)終了。「ニュー社会党宣言」に負けない運動を目指します。労戦がクローズアップされるようになってから、貴誌に全部目を通すようになりました。今年もよろしく！(山形・S)

昨年四月一日、国鉄はJRに移行いたしました。この陰で一片の紙きただけで入門を拒まれるなど、人道的にも許されることが起きています。平和憲法を生活の中へ——。力を合せて首切り撤回！人間の幸せを保障させる！平和な世の中をつくる！一九八八年、大きな「闘いの年」です。(旭川・K)

今年も、増税を断つ(タツ)年です。(町田・T)

いつも心強いニュースありがとう。(秋田・M)

「抵抗パートII」、昨年末に完成しました。新春から上映活動に入ります。日本の労働運動発展のため、この映画を生かしてゆけたらと思います。(埼玉・S)

本年も充実した誌面を期待しています。清算事業団でがんばっています。反失業闘争の

勝利をめざして。

二月一三―一四日に青年部で座り込みを行います。報告しますので、掲載してください。

(北見・U)

今年も額に汗して働らく者のため、「社会通信」に労働運動の糧に、理論と実践の情報をよろしく。

(東京・Y)

新しい年を迎えるたびに世の中は厳しさを増しますが、困難な飛躍へのスタートでもあります。今年も頑張りたいと思います。

(長野・I)

ある本でこんな文章にお目にかかった。「時と空間との矛盾的自己同一的に自己自身を形成する世界の時間面的自己限定として空間的否定的に、判断作用的に言えば、主語と述語との矛盾的自己同一的に自己自身を表現する世界の主語的方向否定的に述語面的自己限定として、我々の自己というものが成立するものである」(西田幾多郎)。三読してもちんぷんかんぷん。一寸先は闇の世の中に流行するのはこんなお化け哲学か。新春は、労働者哲学の再興を心掛けて、小人の勉学に励む心算です。

(千葉・H)

ますます鋭いペンの剣をふるって下さい。

(東京・T)

原対協から次のようなアピールが届きました。

「われわれは人生の生命(いのち)をこそ、すべての物の上におくべきだと考えます。大資本の利益になるからといって、兵器の増産や使用をすすめるために日米安保条約や自衛隊を容認するわけにはいかないのと同様に、原発の増産や使用を決して容認するわけにはいきません。しかも、今日の発電設備は十二分に余裕があつて、火力を優先稼動しさえすれば、すぐに原発を全面休止することができるのです」

この意を受けて、社会党を守り発展させるために、一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。

(東京・H)

一〇「社会党ガンバレ集会」に参加しよう

▽「社会党ガンバレ! 二・一〇国民集会」が二月一〇日午後六時から東京・千代田公会堂で開かれます。学者の新村猛、田畑忍、松尾均氏、評論家の山川暁夫氏、労働運動家の吉岡徳次、六本木敏氏、それに飛鳥田一雄、淡谷悠蔵氏のよびかけによるものです。

▽集会は社会党大会の前日です。参加をよびかけるチラシは、働らく仲間「社会党は国民の先頭に立つて反動化を阻止し、護憲・民主・中立の旗をもつともっと高く立ち立てよ。」その願いを込めて、土井委員長を先頭に闘う社会党を励ますために「この集会を開くとしています。」

▽本誌の読者たち、社会党のゆくえに日本の未来がかかっています。家族、仲間をさそい、この集会を大成功させようではありませんか。ご参加を心からよびかけます。